

巻頭言

弱者にやさしい 交通システムを

鈴鹿市後援会副会長 川北秀洋

私は鈴鹿市の南部、田園地域に住んでいます。年齢は80歳代で見る力も聞く力も弱くなってきました。夜やラッシュ時の運転に不安を感じています。時々運転免許証を返納しようかと思えます。

現在、3か所の医院へ月に数回通っています。もし、免許証を返納したなら、たちまち通院に困ることになります。自宅からCバスの停留所まで歩いて約10分かかります。Cバスを利用しても、通院している医院へは行けません。困ったことです。

聞くとところによると、オンデマンド方式というものがあるとのこと。6人乗りのワゴン車で狭い道でも運行でき、すでに桑名市や明和町で運用されています。鈴鹿市政に望むのはこのような交通システムです。



「円光寺の紅葉」

撮影 鈴鹿の赤旗日曜版読者さん

津市河芸町の円光寺は 晩秋の紅葉と初夏の沙羅双樹の花が有名です。

国賊はだれだ 国葬の朝上京

9月27日早朝、夜行バスで東京に着いた。集会は午後2時から。官邸前に行ってみた。すでに先客がひとり大声で叫んでいた。国会正門前に向かい、しばらく「国葬反対」のプラカードを掲げてぼつんと立っていたが、思い立って会場の武道館にいくことにした。

私が目にしたのは、花束を手にした人々の長い列。衝撃を受けた。考えてみれば3割は国葬に賛成なのだ。一人、「国葬反対」のプラカードを掲げた私をののしりながら、傘や花束で攻撃された。なんと「国賊」と浴びせる人もいた。「国賊は安倍さんでしょ」と返すと、相手は腕を振り上げたが、取材陣がカメラを向けてくれ助かった。

2時からの国会正門前の集会には、1万5千人が終結と主催者発表。うれしかったのは若い人がいっぱいいたことだ。アピールで今日が始まりだと発言した人が何人かいた。そうだ落ち込んでいる場合ではない。精いっぱいあがこう。だって黙っていているわけにはいかないではないか。

(岸岡町 河野真知子)

10月9日付「しんぶん赤旗」に載った投稿を、ご本人の了解を得て掲載しました。



国葬の朝は白子駅でも「国葬反対」のアピール行動がありました

誰でも、いつでも、どこへでも 便利なオンデマンドバス実現を早く



憲法25条では「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有し」「国はすべての生活部面について、社会福祉、社会保障及び公衆衛生の向上及び増進に努めなければならない」と定められています。

オンデマンドバスは玉城町の元気バスと同じように、時刻表や決まったルートもなく、AIが予約状況に合わせて配車や運行ルートを決めて走る乗り合いバスです。人々が外に出かけられることで、人々はもちろんのこと地域にも活気が出ます。そして、それがフレイル予防や認知症予防にもつながり、高齢者にとっては人に出会い会話することで刺激にもなり健康寿命が延びることにもつながります。

市民の生活の足を確保することは、市民の生活の利便性を良くすることでもあり、住みよい町づくりには欠かせません。鈴鹿市の一番弱いところが交通弱者を守ることです。どこへでも、誰でも、いつでも利用可能な公共交通手段の確立を一日でも早く実現することを鈴鹿市長には強く望みます。

(上田町 田中美代子)

市民の笑顔を作る市政を



何よりも、市民が暮らしに困った時には、親身に対応してください。生活保護申請が、県下で一番難しい市だなんて、とても悲しいメダルです。また、子どもたちから高齢者まで、生き生きとした暮らしの土台を支えてください。地域に児童館があれば、遊びを通して友達の輪が広がるのでは？車を手放した後も、お付き合いも、楽しい時間もあきらめなくても良いように、細やかな交通手段をお願いします。市民の笑顔を作るこそ行政の一番の役割と、本気で思っています。

(桜島 谷口礼子)

鈴鹿市政に望む ～私の願い～

ジェンダーについて思うこと

最近でこそ、ジェンダーと聞きますが、その問題の一つ、性暴力・性被害に関して、圧倒的多数は加害者が男性であり、被害者は女性であることは周知の事実ではあると思いますが、その反対の加害者が女性、被害者が男性、または加害者被害者共に男性というケースもごくわずかではありますが、実際にあるそうです。

今、三重県では北勢から南勢まで各地で毎月11日に性暴力は許さないと訴える「フラワーデモ」を行っています。性暴力などというと、つい女性の(被害を受ける)問題だと思いがちですが、そうではないケースもあるということに心に刻み、フラワーデモでも、女性男性関係なく「#Me too」「#With you」の訴えができるといいなと思います。つい、女性ばかりの参加になりがちなフラワーデモ。男性も参加、告知することがとても大事だと思います。女性だけの問題じゃない。男性も被害にあうことだってあるんだ!!!その想いも持って。

(田中美香)



組長になって分かったこと

高齢化が進む住宅地の組長になり、様々な問題を抱えている事がわかった。その一つが高齢者の免許返納後の生活である。ネットスーパーを使える高齢者は多くない。近くのスーパーが潰れてしまい、お年寄り是非常に困っている。

移動スーパーを誘致できないだろうか、コミュニティバスの路線拡大ができないだろうか、など考えたが、それだけではよい社会とは言えない。



安易に高齢者救済措置ではなく「おばちゃん、僕いまから買い物に行くけど、いっしょに乗ってく？」と気軽に声かけできるような、「若者が高齢者を助けやすい社会」にしていくことも必要なのではないだろうか。

(寺家 2児のパパ)

大好きな鈴鹿市だからもっとよくしたい



私は鈴鹿連峰に囲まれたこの鈴鹿市が大好きです。この街をいつまでも好きでいられるよう、どうしても実現してほしいことがあります。鈴鹿市は国保税を引き下げ、減免制度を拡充すること。子どもの均等割をなくすこと。学校給食を無償にすること。弱い高齢者に対して独自の支援をすること。また水道料金を引き下げること。水道の民間委託はぜったい反対。命の水を民間業者が管理したらお金儲け先行で、ずさんな管理になるかもしれない。

市議会の皆様、日々ご苦勞をされていると思いますが、もう少し弱いものの気持ちを汲んでください。鈴鹿市を大切にしてください。

(白子町 小川明彦)

「鈴鹿市運行記録票提出指導違反処分取消等請求事件」の訴状を読み解く!

80歳女性Kさんは、二男54歳Yさんと令和元年10月26日より生活保護を利用している。Yさんは難病のため四日市市と鈴鹿市内の病院に通院している。保護課は令和3年7月9日車の使用は通院に限ること、運転記録票の提出を条件に車の保有を認めた。しかし、このことは人権侵害にあたるため運転記録票を提出しなかったら、令和4年9月27日保護課は生活保護の停止処分をしてきた。そこで、令和4年10月6日鈴鹿市に対して停止処分の取消と損害賠償の訴えをした。このような人権侵害を行う生活保護行政にしたのは鈴鹿市民の責任であり、みなさんと改革したいと思えます。

(岸岡町 下井信夫)



青少年の森とアサギマダラ

青少年の森とアサギマダラという蝶の話です。ボクが快晴クラブ(ランニングのクラブ)に入会したのが70歳、今9年目です。運動オンチのボク、今でもどんくさいです。5年ほど前の話ですが、シンボルタワー南の方向、今はフェンスが邪魔なところ、サッカースタジアムの予定地の谷から野ウサギが走ってくる。2~3人が気付いてビックリ。季節が変われば飛んでくる鳥もいろいろ飛んでくる。こんないいところにサッカー場

を造るとは常識がないとみんな怒っている。

中田さんという人、H社を定年退職して、毎日青少年の森を、毎日雨の日も走る。そして、全国のマラソン大会に出場する。そして、アサギマダラという蝶が大好き。一人でヒヨドリバナ、森に自生する花を大切に育てる。アサギマダラはフジバカマとかヒヨドリバナの蜜を吸う。蜜には少し毒が含まれる。そして、鳥から身を守る。中田さん、アサギマダラが飛んできますよ。

(稲生西 堀川東洋志)

新シリーズ
鈴鹿の街 再発見

第8回

軍都鈴鹿の名残「旭が丘」「暁」

戦前、鈴鹿市が「軍都」として発展してきたことは多くの人知っていることだと思います。記録によると白子に海軍航空隊、平田に鈴鹿海軍工廠、広瀬に陸軍北伊勢飛行場、荒神山に航空隊など次々に軍事施設がつくられていったそうです。

特に海軍工廠建設はそれまでの河芸郡と鈴鹿郡が合併して「鈴鹿市」が誕生するきっかけになったとか。体験記を拝見すると工廠の仕事は昼夜2交代の12時間労働でへとへとになったとか、ちょっとしたことでなぐ

られたりしたとか苦勞がしのばれます。

今も名残となる施設や地名がそこかしこに見られますが、私の家から近い旭が丘は「旭日旗」が、暁は「暁部隊」が地名のルーツになっているという話を聞いたことがあります。忘れてはならないのは「軍都」ゆえに空襲を受け昭和20年7月、算所に爆弾が落とされ30余名が犠牲になったことです。多大な労苦のうえに築かれた今日の平和を守っていくことは今を生きる私たちの大きな使命ではないでしょうか。

(桜島 谷口 茂)



平和の尊さを伝えるモニュメント(桜の森公園内)

鈴鹿市の生活保護行政を問う訴訟に思うこと

鈴鹿市議会議員 石田秀三



10月6日、鈴鹿市の生活保護停止処分の取り消しを求めて、保護利用者が津地裁に提訴しました。障害があり自動車でない通院や用事に出られない利用者に、保護課は事細かな「運転記録票」の提出を強制し、これを「人権侵害」だと拒否した事を理由に「保護打ち切り」をしたことの是非を問う裁判です。

14年前の不正支給事件をどう反省したのか？

鈴鹿市には「前科」があります。2008年1月に発覚した「生活保護不正支給」事件で、鈴鹿市は全国にその名を轟かせました。「越山グループ」と呼ばれる40人33世帯が03年から07年に不正に受けていた保護費は総額3億円、うち「通院移送費(タクシー代)」だけで約1億円という驚くべき規模の事件でした。

外部に設置された「調査委員会」は2009年3月に、鈴鹿市保護行政の問題点を検証、再生のための提言を出しています。報告書では、犯人たちの詐欺の手口と共に、鈴鹿市生活支援課(当時)が詐欺行為を見逃した、あるいは黙認したことについて、「ズサンで無責任」な事務処理が日常化し、そこを犯人らにつけ込まれた、としています。そして「法令遵守の相互確認・決裁の徹

底・現金取り扱いの見直し・不正への組織的対応・」などを提言しました。

市役所の「組織風土」を変えなければ

この手痛い経験と市民からの批判を受けて、鈴鹿市の保護行政は生まれ変わった・はずでした。今回の訴訟の論点の一つ、「通院移送費」ですが、当時に億単位で支払っていたものが、今は「ほぼゼロ」です。不正もない代わりに、「本当に必要な人」にも1円も出そうとしないうのです。「使い放題」と「ゼロ」！両極端の現象に見えますが、共通点があります。それは、どちらも職員が「思考停止」だということです。自分の古巣である市役所に、こんな言い方をするのは心苦しいですが、これが問題の本質ではないかと思っています。

当時私は、議会でこんな追及をしていました。「なぜ誰一人として止めようとしなかったのか？地区担当が毎年ローテーションし、また毎年人事異動で職員が替わっているのに、だれも不正を止められなかったのはなぜか？」調査委員会はこのことを「組織風土」と表現していました。今回の訴訟を期に、「組織風土を改めよう」の声、職員の皆さんから起きることを期待しています。



『わが青春つきるとも』 伊藤千代子

鈴鹿市議会議員 高橋さつき

いま、当たり前主張できる反戦平和、国民主権の訴えは、戦前の絶対的な天皇制政治の時代では「非国民」「国賊」扱いされました。

女性の政党参加は認められなかった当時に、日本共産党だけは伊藤千代子さんをはじめとする多くの女性党員が居たことをこの映画を観て知りました。ジェンダー平等の先駆者ですね

労働環境改善にたたかう労働者は『ただ、ふつうの暮らしがしたいだけなのに…』、伊藤千代子は『朝から晩まで働いても満足にご飯が食べられない貧しい人たちがいて、一方では贅沢をしている人たちがいる。この不公平な社会をなんとかよい社会にしたい』というセリフが今の時代と重なり胸がギュツとなりました。

リーダー的存在の伊藤千代子さんは治安維持法で

弾圧されても権力に負けずに侵略戦争に反対し、格差を正す社会変革を訴え続けて、24歳の若さで拷問を受けて獄中死してしまいます。彼女らが訴えた事は日本国憲法にいかされたけど、彼らの活動がなければどうなっていたんだろう。また彼らが生きていたらどう変わっていただろう。

千代子さんが通った東京女子大学は彼女たちを誇りに思い、千代子さんが使っていた東寮のひと部屋だけ保存されているそうです。

戦争が身近に感じられる今、絶対に戦争を繰り返さないように、命がけで戦争に反対してきた人たちの事やその時代を改めて見つめ直すべきではないかと思います。

